

政治学概論 II 2024 w3 (1 月 8 日) リーディングアサインメント：

細谷雄一・遠藤乾「これはグローバリゼーションの反動なのか？」

| 氏名 | Q1 | Q2 |
|-----|---|--|
| 岩田 | 多少のコストを払っても、目の前の問題に共同で対処することが、最終的には自己利益につながる。(p.107) | 自己利益ばかりを追求していると、結局は自らが不利益な結果になってしまうということから、何事も他者と協調することが重要であると感じたから。自己の主張を強引に突き通そうとすると、力づくで制圧することにつながる。そうならないためには、多様性を表明する場を提供することが必要であると書かれていることから、自己の主張と他者との共同の両方が重要であると考えている。 |
| 内坂 | 私が面白いと思った箇所は 105、106 ページの「グローバリゼーションが進むほど差異化の願望が強まる」という部分である。 | グローバリゼーションとは今まで、どちらかと言えば良いことのように思っていたが、それが進めば進むほど、差異化の願望が強まり、「危険な」ことになる可能性が否定できないという部分が印象に残ったからである。保守党のイデオロギー的な硬直化が地域の自治や独立に起因するということが分かった。多様性を表明する場を提供せず、力づくで制圧したり、政治・経済・文化を中央が続べてしまうと、紛争が激化してしまうということも印象に残った。 |
| 宇名手 | 日本におけるスコットランドとウクライナの現状の認識について (104～105 ページ) | 日本の一部の識者でさえ、スコットランドとウクライナの状況が全くの別物であることを理解できていないということに少し驚いた。また、他の国や地域で上手く行ったことが必ずしも自国で通用するわけではないということを感じさせられた。それと共に、それぞれに適した対応策があるということにも気づかされたから。 |
| 遠藤 | スコットランドの民主主義を示した独立運動が重要だと思った。(p.104) | 軍事力の行使によって秩序形成を実行して現状を変更しようとする地域があるのに対して、スコットランドのように住民投票による民主的なプロセスを踏みながら独立運動が進められ、結果も尊重される地域もあるということが興味深いと思ったから。しかし、法の支配が徹底された世界と軍事力を背景にした世界は全く別であり、他の地域でもスコットランドのようにすればよいと単純に考えてしまっただけとはいけないということが重要であると感じたから。 |
| 大石 | P106 「弱い国」をサポートしていく体制について | 世界の中では様々な戦争・紛争・飢饉などが起きているが、とりわけ戦争においては弱い国・世界的に支持される国を助けていくことが必要とされている一方で、干渉しすぎてしまうと相手から敵国だと判断され戦争に介入しなければならぬ事態となるため、グローバル化により国ごとの距離感や政治姿勢を表すようになっていくと感じ、自分の新たな視点になったから。 |
| 大久保 | 連合王国の民主主義を示した (p103) | このことがどうしてこのように言われるのか疑問に思ったが、歴史的に見れば独立をしようとなったときには独立を目指す勢力と阻止する勢力がぶつかり合い戦争に発展しており、そんな中で、民主的な手続きに基づいて行われていることはこのような考えが重要になってくるものであると思った。しかしながら、このような例はごく一部であり、「力による行使」が常態化しているようにも思った。 |

(continued)

| 氏名 | Q1 | Q2 |
|----|---|---|
| 片山 | 105 東京一那覇関係に、容易に類推可能 | そもそも、スコットランドと沖縄の状況は違うはずなのに、類推可能と言うのはおかしいと思うし、なぜ類推できるのか訳がわからないし面白いので。実際、なぜ沖縄に基地があるのかは、中国を警戒してなわけだが、逆に言えば基地が無ければ中国に責められる可能性が高いのは、簡単にわかる。また、基地反対と言っているのは主にジジババの共産主義者であるし、独立を熱心に言っているのは、高齢者や知事がほとんどな気がする。なので、スコットランドと沖縄は状況が違う |
| 加藤 | 106 ページの「地方は本当に消え、格差だらけの都市が出現するのではないかという気がするのです」の箇所が重要だと思った。 | この記事では、国際的な国との関わりのなかでその国の操舵性が薄れたり、それを細分化した一国家での分断の例が扱われたりしていた。そのなかで日本は、国際的に見た時に多様性の表明の場、国単位で見た時に都市と地方の格差の是正が重要だと感じた。特に、都市と地方の格差に関しては、緊迫していると考え。都市への一極集中が進むなかで地方の経済や社会保障は縮小し、移住者も減っていくという負のサイクルに入っているからである。国際的な格差もあれば、国単位でも格差が生じることがこの記事を読んで印象に残った。この箇所が自身の認識と照らして重要だと思った。 |
| 黒田 | 多少のコストを支払っても、目の前の問題に共同で対処することが最終的には自己利益につながる。 p 107 | 現在は、国家が自己利益を追求して政治を行う風潮であるが、国家内外問わず、目の前の問題に地方と国、または国と国同士が共同して対処していけば、めぐりめぐって国家の利益に繋がることを初めて知ったから。日本の自治体「消滅」問題は、都市格差を助長させる施策では解決しないため、少しでも地方と共同して政治を行ってくれる政治家を選びたいと思ったが、国家を動かすことはかなり大変で、裏の大きな力が操作している可能性もあるのだろうなと思った。 |
| 小松 | 104 | 94 年のブダペスト覚書と 97 年の友好条約において、ロシアとの国境線を変更しないことで合意していることや、領土の変更がウクライナ国民による投票でのみ解決されることなどが決まっているにもかかわらず、クリミア独立や今のウクライナ紛争が起きているということを知った。法の支配が機能しておらず、内政干渉ともとれる動きが現在ロシアによって行われていることについて改めて考えさせられた。 |
| 高橋 | スコットランドの労働党も保守党も結果的に地方の独立への思いを見誤ったにもかかわらず、運動を抑えつけることなく民主主義的な対応を貫いた点が重要だと思った。(p.104) | その理由は民主主義国家において、その時々政権にとって都合な事態が起こった場合この事態を早く収束させ、自分たちにとって都合の良い方向に転換させるためには手段を選ばないという印象が強かったからである。ロシアや中国のように目的達成のため強大な力を行使し、相手国を制圧・抑圧することは決して真の民主主義とは言えず、その一方でスコットランドの政府こそが民主主義を体現した理想的な政府であると考え。 |
| 田辺 | 世界市場が国民国家に及ぼす影響について 101 頁 | 第 2 回の講義でグローバル・ガバナンスの難しさのひとつとして、市場を制御できないことが挙げられていたが、具体的にどういう関係してくるのかイメージできていなかった。今回の論考において、イタリアの北部同盟の概要が紹介され、世界市場がどのように国民国家に亀裂をもたらすのか知ることができたから。一方で、日本をイメージした際、「世界市場というのは、安定した国民国家さえ引き裂く」といえるのか疑問に思った。 |

(continued)

| 氏名 | Q1 | Q2 |
|-------|--|---|
| 爲石（康） | p.106 連帯を取り戻せるか | 遠藤氏が述べているように国家というものがひたすらに弱体化していると感じた。それを引き起こしているのは主権者である我々である。ここで重要だと思ったのが EU のような国家間の連携である。EU とまではいなくても、同盟などを結び、連携して国家をつくっていくことで未知の脅威に対抗できる唯一の手段であると感じたから。 |
| 為石（智） | スコットランドの独立運動 | スコットランドが EU を独立した当時は、EU 内の国家格差から、国民が支援する側でいることに不満を持っていたことが理由であるという認識でいた。この資料では、前述したような教育・医療の支援への不満に加え、EU という広域共同体への包摂意識から脱退することに抵抗を持たない人が一定数いることが分かった。 |
| 西田 | 「投票一週間前くらいの時点で独立賛成多数という状況が逆転したのは、住民が最後の最後、そこを冷静に判断した結果」（103 頁） | この箇所はスコットランドの住民投票について書かれており、EU から独立するかどうかを投票によって決定する場面である。この住民投票では初めに若者が独立賛成をしていたが、投票一週間前にして高齢者が独立に強く反対した結果、独立反対派が逆転した。この箇所が重要だと思った理由は、近年の日本には選挙の投票率が低いことから、比較的投票率の高い高齢者の意見を反映した政策が行われるなど選挙結果や政策に偏りが生じているという課題があるからだ。スコットランドのように各世代が投票の議題をきちんと理解し、投票を行うことで全体の民意を政治に反映できる。したがって、日本も見習うべき点だと考えたため重要な箇所として挙げた。 |
| 丹羽 | 世界のグローバル化 | 私事ではあるが、12 月 22 日に受けたセミナーのようなもので「グローバル化」について真剣に考える機会があったので、「世界のグローバル化」というキーワードが面白いと感じた。セミナーで考えた「グローバル化」は「国際化」という言葉との比較が行われていた。そこでは、「グローバル化」は「国際化」とは異なり「国民、国家関係なく世界相互のネットワークに巻き込まれていく」ことだと定義されていた。この文献でも「スコットランドの独立運動」について少し触れられていたが、「世界のグローバル化」とは、世界の人びとが主体的になっていくことを表していると考えているので、スコットランドの国民が「自分たちの国をより良いものにする」という「グローバル化」の中で起こった主体的な運動の現れだと感じた。 |
| 原田 | スコットランドの独立と EU の関係性 | スコットランドの独立賛成多数という状況について詳しく述べられていたが、ネガティブな面とポジティブな面の両面について考え、冷静に判断を下すことができる能力や情報を詳しく知ることが重要・重要でないに関わらず判断をするためには必要であり重要なことであると考えたため。また、投票などでは投票する人の社会的な立場などがより反映されるということも知ることができ面白と感じたため。 |
| 本田 | 独立運動の底流にあるもの | 現在起きている独立運動は言ってみれば、世界のウェーブなのだと知ったから。世界で波のように起きているのがこの運動だと知って、とても関心した。私も新聞などでよく独立の話題について目にする。それは民衆にとっては必至の抵抗であり、願いでもあると伝わってくる。そのため、なぜ独立運動が起きるのか、その根本にあるものがとても気になったから。 |

(continued)

| 氏名 | Q1 | Q2 |
|----|---------------------------------|--|
| 本間 | P 103 の独立の際のセーフティネットの部分 | EU 残留が多かったことからイギリスからの独立が目指されていたにも関わらず、独立後の EU など対外関係の不安定さから独立が否定的になることが良く分かった。グローバル化が進む中で、弱い国ほど自国のための政策がとれない状況になっていると感じた。また、力関係的に弱い国地域は、他国と友好な関係を築くことが求められており、格差が広がっていくような気がした。 |
| 三島 | 国家は弱体化しているのではなく、無限に強い (106 ページ) | 国家は、グローバリゼーションによって主権の再編が求められる中でも、経済や法制度の統制力、法の支配による秩序維持、さらに軍事力と安全保障の独占を通じて統治能力を強化し続けており、その柔軟性と支配力によって依然として強い存在であるのだと感じたから。 |
| 渡邊 | スコットランドの EU 離脱について (103 ページ) | 住民の投票の 1 週間前くらいには独立賛成が多数となっていたけれど、EU から離脱すると通貨の問題であったり、不便だと感じても再加盟には 10 年ほどかかってしまったりと EU の離脱が住民の生活を大きく左右するということが分かったからである。また文章から最後の最後で状況が逆転したとあり、安易な考えで投票したのではなく、離脱することでどうなるのか最後まで考えだした結果が結果に表れたのだと思い、投票の前にしっかりとどう変わるのか比較することが重要だと感じた。 |